

日本ミルトン協会第 10 回研究大会
研究発表及びシンポジウム資料

於：青山学院大学青山キャンパス

日時：2019年12月7日（土）

日本ミルトン協会第10回研究大会プログラム

日時 2019年12月7日(土) 12時40分より[12時15分受付開始]

場所 青山学院大学青山キャンパス 17号館 17507教室

○委員会 (11:15~12:35) 17号館 17508教室

○開会の辞 (12:40~12:45) 会長 西川 健誠

○研究発表 (1. 12:45~13:25 / 2. 13:30~14:10)

司会 川崎 和基

1. 続 *Paradise Lost* の神学——16-17世紀の自由意志—— 堀内 直美
2. *Pureness* よりも *Fairness* を——入植初期のニューイングランドにおける
教会統治の理念 (仮) 松村 祐香里

○ミニ講義 (14:15~15:05)

司会 富樫 剛

新井明先生、毬藻の会、そして *Early English Books Online* :

私とミルトン研究

野呂 有子

○休憩 (15:05~15:20)

○シンポジウム (15:20~17:35)

ミルトンと書物

オーガナイザー 渡辺 賢一郎

1. 公共図書館の中のミルトンのパラテキスト——『1645年詩集』に貼り付けられた1647年の書物へのオード

圓月 勝博

2. *Milton Never "Ate"*: 『樂園喪失』、1667年の「ブランク」・ヴァース

川島 伸博

3. 18世紀末の「樂園回復」——周辺からの読み替え

渡辺 賢一郎

○ 総会 (17:35～18:00)

活動報告

会計報告および予算審議

会計監査報告

来年度大会・研究会予定

その他

司会 西川 健誠

笹川 渉

金崎 八重

江藤 あさじ・倉恒 澄子

○ 閉会の辞 (17:55～18:00)

西川 健誠

○ 懇親会 (18:15～20:15)

於：青山学院大学キャンパス内 アイビーホール「**filia** (フィリア)」)

JR 山手線、JR 埼京線、東急線、京王井の頭線、東京メトロ副都心線 他「渋谷
駅」より徒歩 10 分 東京メトロ (銀座線・千代田線・半蔵門線)「表参道駅」

より徒歩 5 分 (裏表紙に地図あり)

研究発表 1 :

続 *Paradise Lost* の神学——16-17 世紀の自由意志——

堀内 直美 (青山学院大学大学院)

2018年12月に開催された日本ミルトン協会研究大会で、「*Paradise Lost* の神学——16-17 世紀の予定説」と題して冨樫氏が発表された内容は、長年 *Paradise Lost* の神学が Arminius 派の神学とされている定説への鋭い反論であった。氏によれば、Calvin 以降 17 世紀半ばまでの予定神学は、完全なる予定を論じておらず、また、救済・破滅の予定を論じながら同時に人の自由意思・意志を認めていた、あるいは、認めざるを得なかったということになる。だが、Calvin 主義神学の全面的墮落の教義や、Arminius 主義的神学の影響は *Paradise Lost* の中に全くないのであるか。

本発表ではこの疑問を解明したい。そもそも Calvin は *Institutes of the Christian Religion* (1532) 第 2 巻 1-5 章で自由意志について論じている。本論ではまず、自由意志論争の先駆者である Desiderius Erasmus の *On Free Will* (1524) と Martin Luther の *On the Enslaved Will* (1525) を取り上げ、自由意志とは何かを確認する。次に Calvin を取り上げ、Calvin はどのように自由意志を考えているのかを確認する。そして、*The Canons of the Synod of Dort* (1619) と *The Five Arminian Articles of Remonstrance* (1610) を考察し、人間の全面的墮落と自由意志の関係がどのように考えられているかを考察する。

最後に、上記の議論を踏まえ、*Paradise Lost* で墮落前後の人に自由意志がどのように表現・展開されているのかを考察する。それによって、Milton は全面的墮落した人を描いていることを明らかにしたい。さて、これは、誰のどこからの言葉であろうか？

人は原初、神の似姿に形作られた。彼の知性は創造主による真の救済の知識を添えられていた。また精神的なもの、つまり、心と意志は正しく、あらゆる彼の愛情は純粋で、人全体が敬虔であった。しかし、悪魔の唆しによって神に背き、また彼自身の意志の自由の誤用によって、彼はこれらの素晴らしい賜物を捨てた。そして反対に心の盲目、恐ろしき闇、傲慢そして判断の倒錯を与えられ、邪悪で、反抗的で頑なな心と意志になった。また、あらゆる愛情が不純になった。

研究発表 2 :

Pureness よりも Fairness を——入植初期のニューイングランドにおける教会統治の理念 (仮)

松村 祐香里 (金沢学院大学)

1630 年半ばから 1650 年にかけてニューイングランドで指導的役割を果たした牧師たちの言説を手がかりに、教会統治の理念をめぐる内乱期のイングランドとニューイングランドの並行関係と相違を考察する。

ピューリタンという単語は、1570 年代、エリザベス女王統治下で使われ始めた。この倫理的に厳格で「ピュアな」一派は、道徳の衰退を批判し、国教会の改革を強く主張したために、やがて国家の弾圧の対象となる。ジェームズ 1 世が弾圧を強化したのを機に、いわゆる巡礼の父祖たちは新たな信仰の地を求めてイングランドを後にする。では、ニューイングランドこそがピューリタンが理想とする国家建設の舞台だったのだろうか。デイヴィッド・D・ホールが指摘しているように、この入植を一部の急進的なピューリタンが新天地を目指したものであると捉えることは、多くの誤読と誇張を含んでいる。

ニューイングランドに渡った者たちが求めた統治を理解するためには、入植初期の牧師たちによる「神聖な統治」に関する議論に触れる必要がある。たとえばジョン・コットン (John Cotton, 1585-1652) は『黙示録』に関する説教のなかで、教皇主義を厳しく非難し、最もふさわしい教会形態は会衆主義であると主張した。さらに彼は会衆統治のための権威を一般信徒に与えることにも同意し、多くの賛同者を得た。彼とその追隨者が求めたのは、恣意的な権力を制限し平等な統治を設けることだったのである。

ピューリタニズムを語る時、我々は、その厳格さや異物に対する極端な排斥という負の側面を想起しがちである。しかしイングランドで 1649 年に国王を処刑したことが「神の導き」という言葉で正当化されていた時期に、自由と公正、人々の合意なき権力は正統ではないという点にこだわり続けたピューリタンがいたことも事実である。これを近代的な民主主義と結びつけるのはあまりにも性急であるが、その萌芽を見出すことは可能であろう。

ミニ講義：

新井明先生、毬藻の会、そして *Early English Books Online*：

私とミルトン研究

野呂 有子（日本大学）

この11月3日（日）に「新井明先生を囲む会」が湘南クリスタルホテルで開催された。先生が深く関わってこられた世田谷の経堂聖書研究会が中心となって編纂された『新井明選集』全三巻（出版社：リトン）の出版を記念して30人ほどの関係者が集まり、2時間程の心通い合う時間を共有することができた。新井先生が立ち上げ、後に野呂が後を受けた毬藻の会からも6名が参加させて頂いた。

40年以上続く毬藻の会では、これまで17世紀英国の革命叙事詩人 **John Milton** (1608-74) の、主に散文作品の日本語訳を世に送り出してきた。『教会統治の理由』、『離婚の教義と規律』、『マーティン・ブーサー氏の判断』、『イングランド国民のための弁護論』、『イングランド国民のための第二弁護論』等である。『偶像破壊者』訳は現在、『王の像』訳抜粋と併せて、金星堂から出版すべく鋭意準備中である。他に『自由共和国樹立の要諦』と『教会問題における世俗権力』訳は終了し、出版時期を見計らっている。現在、会では『ブリテン史』の訳読に取り組んでいる。こうした作業を通して、多くの秀逸な論文が生まれ、一部は国際的にも評価されている。

さらに、毬藻の会を中心にプロジェクトチームが生まれ、新井訳『楽園の喪失』および『楽園の回復』・『闘技士サムソン』とミルトン原典の対照・比較版テキストをウェブサイトに掲載するため、*EEBO* からダウンロードした *Paradise Lost* 初版10巻本および改訂版12巻本等を打ち込み・校訂し、コロンビア版と比較検証する作業をほぼ終えたところである。メンバーの献身的・精力的な協力のお蔭で、打ち出し原稿約300枚を製本し献辞を添えて「囲む会」で新井先生に献呈することができた。

今回、機会を与えていただいたミニ講義ではこうした一連の作業について、若い研究者諸君に参考となるお話ができれば良いと願っている。

シンポジウム

ミルトンと書物

講師：渡辺 賢一郎（川村学園女子大学非常勤講師、司会）

圓月 勝博（同志社大学）

川島 伸博（龍谷大学）

2008 年から刊行中の OUP 版ミルトン全集は従来の定説を覆す新しい書誌学の見解をいくつも示している。たとえば第 II 巻（*The 1671 Poems: Paradise Regain'd and Samson Agonistes*）の編者 Laura Lunger Knoppers は、かつて Helen Darbishire がこの著作に存在すると提唱したミルトン独自の綴りと句読法のルールという仮説の無効を説く。また初版で行間が極端に狭くなっているページを、印刷の際に **cast off** がなされたためだと分析する。さらに初版と第 2 版の出版者 John Starkey に多くのページを割き、この本の出版当時の政治的・文化的状況を明らかにする。つまりこの巻は、一方で基礎的な分析書誌学的事実を明らかにしながら他方で書物史あるいは新しい書誌学のアプローチを取り入れ、ミルトン研究の土台を大幅に更新している。

このシンポジウムは以上のような書誌学のアプローチに基づきミルトンの作品を書物として考察する。前世紀末に Jerome J. McGann や D. F. McKenzie らによって、いわゆる新書誌学への批判が行われ、書誌学は広く社会的なコミュニケーションを分析する研究へと拡大した。この新しいアプローチが目指すのは、作者の意図を重視する新書誌学がノイズとして排除してきた様々なもの、たとえば出版に関わる作者以外の人物、権威ある本文を収録しないとみなされた版、また、モノとしての本の側面、タイポグラフィやレイアウト、パラテキスト、などである。新書誌学が抑圧したこのような側面を改めて考察することで新しいミルトンが見えてくるのではないだろうか。

公共図書館の中のミルトンのパラテキスト

——『1645年詩集』に貼り付けられた1647年の書物へのオード

圓月 勝博

1645年10月6日、ジョン・ミルトン（John Milton, 1608–74）初の個人詩集 *The Poems of Mr John Milton, Both ENGLISH and LATIN, Compos'd at several times*（以下『1645年詩集』）が書籍出版業組合に登録された。しかし、サー・トマス・ボドレー（Sir Thomas Bodley, 1545-1613）によって1602年に開館し、近代イギリス書物文化の金字塔となるオックスフォード大学ボドリアン図書館に所蔵されている『1645年詩集』には、1647[6]年1月23日付の“Ad Joannem Rousium Oxoniensis Academiae Bibliothecarium [To John Rouse, Librarian of Oxford University]”という詩の手稿がラテン語詩のタイトル・ページの裏に貼り付けられている。上記図書館に献本した『1645年詩集』が紛失したので、再献本した際、図書館司書のジョン・ラウス（John Raus, 1574-1652）に宛てて、ミルトンが紛失した詩集を主題にしたラテン語オードを新たに書いたのである。

上記ラテン語詩は、1673年に『1645年詩集』が増補再版されたとき、テキストの中に活字印刷されることになるので、活字出版中心主義を踏襲するOUP版においては、1673年出版の増補再版に追加収録された作品に分類されている。たしかに、活字印刷されたテキストを最終的な研究対象と考える従来の書誌学に従えば、上記ラテン語詩は、1673年が初出となる。しかし、手稿回覧も初期近代における重要な出版形態であることを強調する近年の書物史研究の成果と照らし合わせるならば、上記ラテン語詩は、ミルトンがその手稿を『1645年詩集』に貼り付けて、ラウスに届けた時点が初出と考えるべきであろう。

事実、『1645年詩集』の中には、活字印刷された本文の中にも、様々なパラテキストが挿入されている。本発表の目的は、『1645年詩集』に貼り付けられた1647年のラテン語詩を手がかりにして、従来は重視されていなかった『1645年詩集』のパラテキストを詳細に検討しながら、ボドリアン図書館に所蔵されることをミルトン自身が強く希望した書物の中に刻印された詩人像の解説を試みることにあつた。

Milton Never “Ate”:

『樂園喪失』、1667年の「ブランク」・ヴァース

川島 伸博

1667年8月20日にサミュエル・シモンズ (Samuel Simmons, 1640–1687) によって書籍出版業組合に登録された『樂園喪失』 (*Paradise Lost*) はその秋頃に初めて出版されたと考えられている。この初版には異なる表紙が6種類確認されており、最初の3つには出版者であるシモンズの名前は銘記されていない。また2つ目の表紙では作者であるジョン・ミルトン (John Milton, 1608–74) を示す活字が最初のものよりもかなり小さくなり、3つ目の表紙では J. M. とイニシャル表記になってしまう。この辺りの事情には、国王殺しのミルトンの詩をなんとか売ろうとする出版者シモンズの苦悩が見てとれる。

しかし、1668年の4つ目の表紙以降、突如、シモンズはミルトンの名前を復活させ、自分の名前も出版者として表記するようになる。さらにこのヴァージョン以降、本文の前に「印刷者から読者へ」 (*The Printer to The Reader*)、ミルトンによる巻ごとの「梗概」 (*The Argument*) と「韻律論」 (*The Verse*) と正誤表 (*Errata*) が追加される。この変更の背後には、なんらかの事情の変化があったにちがいないのだが、それは類推の域をでない。確実なのは、読者の便宜のために追加されたはずのこの「梗概」と「韻律論」が、皮肉にもこの叙事詩の読みを制約していったという事実である。

本論は、1667年の最初のヴァージョンに戻ることで、ミルトンの「韻律論」とそれに基づく脚韻廃止論者としてのミルトン像の束縛から自由になることを提唱する。そして、その立場から、『樂園喪失』 (1667) のテキストに存在する、我々が見逃してきた (見逃そうとしてきた) 30を超えるヒロイック・カプレット、特に、第8巻 (1674年版以降は第9巻) でイブが禁断の実を口にす、まさにその瞬間に生じる脚韻 (現代の標準のエディションから消されている脚韻) について考察していく。

So saying, her rash hand in evil hour
Forth reaching to the Fruit, she pluck'd, she eat
Earth felt the wound, and Nature from her seat

Sighing through all her Works gave signs of woe,
That all was lost. (VIII, 780-4)

18 世紀末の「楽園回復」
——周辺からの読み替え

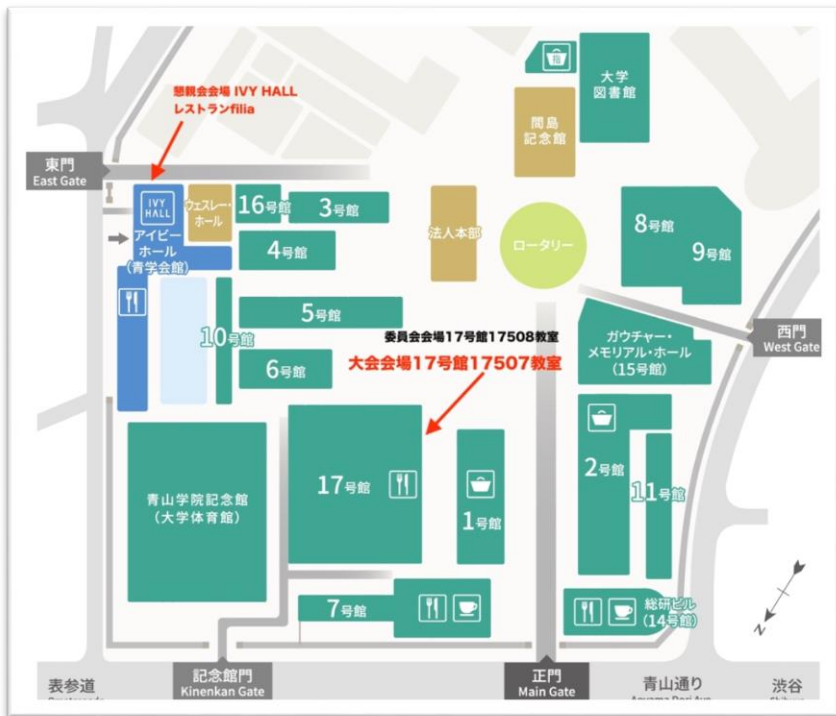
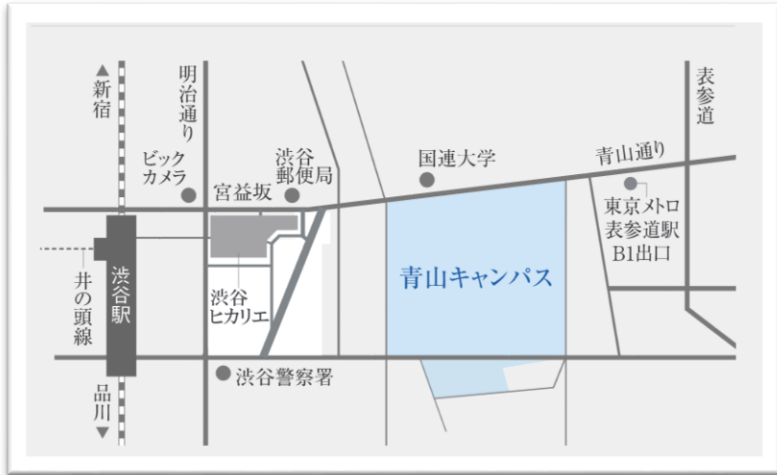
渡辺 賢一郎

18 世紀初頭『スペクテイター』(*The Spectator*) エッセイなどの影響で *Paradise Lost* (以下『楽園喪失』) は評価を高め、以後も売れ行きを伸ばしていく。それに対して “Paradise Regained” (以下「楽園回復」) は 1671 年に初版が「闘士サムソン」(“Samson Agonistes”) との合本の形で出版されて以来、18 世紀の半ば過ぎまで高い評価を受けることは少なかった。初版のタイトルページに明らかなように、もともと「楽園回復」は『楽園喪失』の続編を意図して出版されている。このことによって「楽園回復」の売れ行きは伸びたかもしれないが、しかし同時にこれは「楽園回復」の評価を低くする一因となっただろう。2つの作品が常に比較対照され、「楽園回復」は『楽園喪失』より劣る、とみなされるようになったからだ。

このような優劣関係は多少の例外はあっても 18 世紀に長く続く。しかし世紀後半になると状況が一変する。「楽園回復」は高い評価を受けるようになり、初めて「闘士サムソン」との合本ではなく単独の書物として出版される。これまでの優劣関係が逆転し「楽園回復」は『楽園喪失』より高い価値を持つ作品であるとさえ時に言われるようになる。このことはどのようにして実現されたのだろうか。

18 世紀、ベントレー (Richard Bentley, 1662-1742) を例外として、ミルトンの作品の本文はシェイクスピア作品のように大幅に書き換えられていない。変わったのはテキストの周辺である。このような観点に基づき、「楽園回復」の評価に関して影響力の大きかった Henry John Todd の *The Poetical Works of John Milton* (1801) などはずでに研究されている。この Todd が参照したのが Charles Dunster の編集した『楽園回復』(1795)だが、Dunster についてはこれまで注目されることが少なかった。そこでこの発表は Dunster の編集した『楽園回復』を主に取り上げる。それがいかに「楽園回復」の理解を方向づけたかを、パラテキストやタイポグラフィに注目して考察したい。

青山キャンパス案内図



セブンイレブン (1号館1階)、学食 (17号館1階と7号館地下)